

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌
【かざぐるま】

2012 冬号 **57**

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 **かつらぎ町西渋田遺跡の発掘調査**

連載

文化財建造物課短信
和歌山文化財百景
きのくに歴史小話
「建築彫刻の話」
「発掘屋余話」



かつらぎ町 西渋田遺跡の発掘調査

西渋田遺跡は伊都郡かつらぎ町に所在し、紀ノ川中流域の南岸に位置する標高約60mの低位段丘面に展開する遺跡です。

今回の調査は和歌山橋本線地方特定道路の整備に伴うもので道路用地975㎡の発掘調査を行いました。

周辺では以前より、縄文時代の石鏃や縄文土器などが採取されており、縄文時代の遺跡が展開すると推測されてきました。また中世の頃には、志富田荘（渋田荘）と渋田の名前がみられ、田畑を開墾し生活を営んでいたことが伺えます。

西渋田遺跡では、遺跡範囲の西側で西渋田1号墳が確認され箱式石棺が検出されていますが、大規模な発掘調査は今回が初めてです。

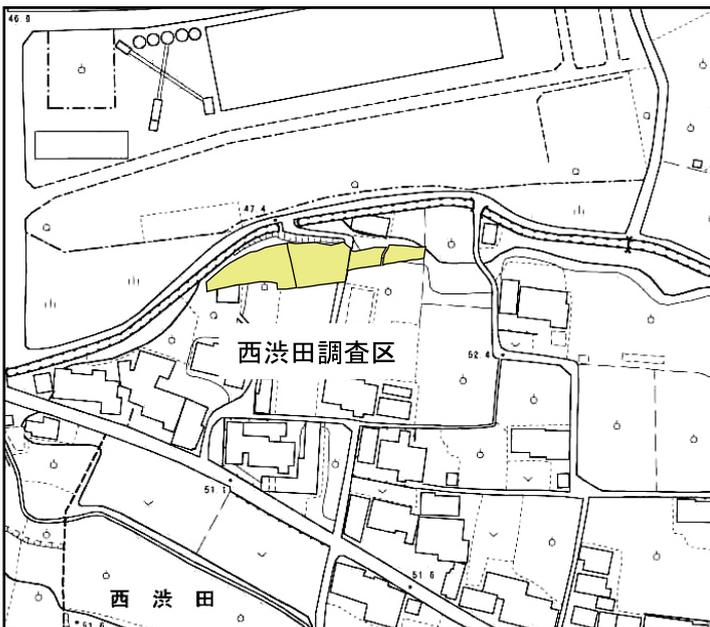
発掘調査で検出した遺構は主に古墳時代のものです。調査区中央南側で方形の竪穴建物跡を2棟検出しま

した。1棟(030)は調査区中央で、規模は約5mの方形の竪穴建物で、柱穴の間隔は約2.8mです。近くに焼土を伴う土坑(035)を検出しており、カマドと推察されます。竪穴建物からは、須恵器の高杯などが出土しており、古墳時代中期のものと考えられます。

もう1棟(135)は、後世の掘削により竪穴建物の平面の形は不明ですが、調査区東側でカマドを検出しました。北側で検出した土坑などから約4mの規模の竪穴建物と推測されます。

また、柱穴(080)からは、土師器と5cm大の石が出土しました。土師器は2個体あり、口縁部を合わせその上に石を置いていた状態と推測されます。地鎮等の何らかの祭祀を行ったと考えられます。

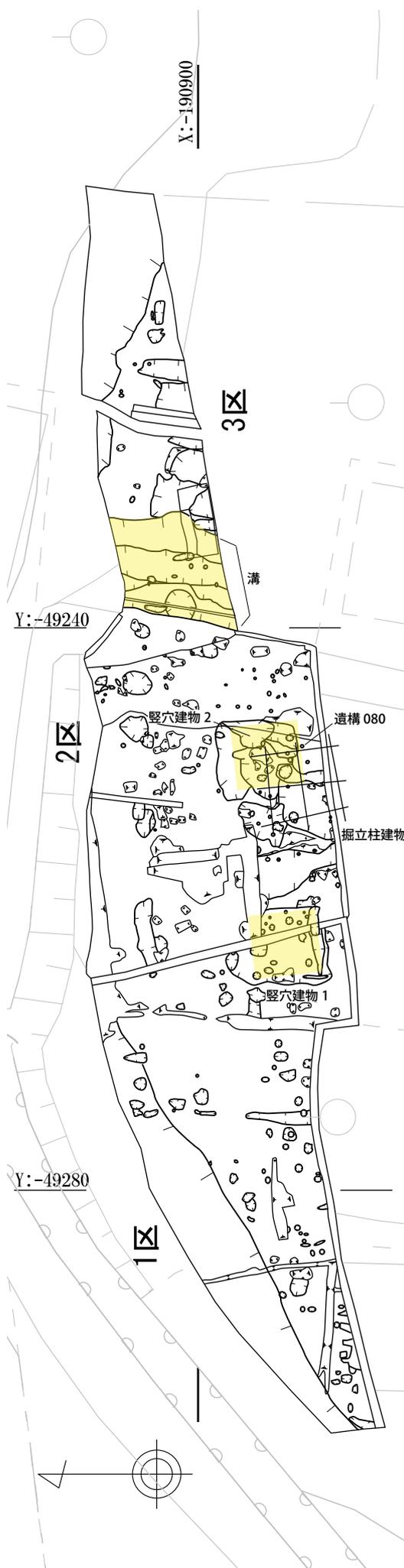
その他に、ほぼ真北に向かい流れる溝を調査区東側で数条検出しました。幅約5mのものもあり何度か掘削され



調査区位置図 (S=1/3,000)



周辺の遺跡 (S=1/30,000)



遺構 035 土器出土状況



遺構 030 (竪穴建物 1)



遺構 030 (竪穴建物 1)



遺構 030 (竪穴建物 1)



調査区 2 全景



遺構 135 (竈穴建物 2: カマド)



遺構 100 サヌカイト出土状況



↑遺構 080 土器出土状況
←遺構 059・066・072 溝

ています。下層で検出した溝からは、須恵器の杯つぎが出土しており、古墳時代中期と考えられます。最も古い溝以外については、遺物が少なく、古墳時代以後の可能性が考えられます。また周辺では渋田条里しぶたじょうり(古代から中世後期にかけて行われた土地区画)が

確認されています。今回検出した溝は、条里区割りに伴う溝とするには掘削方向や、対となる区画が周辺で確認されていないこともあり、現時点では農業用水等の理由で掘削されたものと考えられます。その他には、調査区中央で2間×2間の掘立柱建物ほったてばしらたてものを検出しました。

出土遺物では、磨製石斧ませいせききや、約15cmのサヌカイト製の石器(未製品)、縄文時代・弥生時代の石鏃いしじゆのほか、その材料であるサヌカイト片も多く出土しています。

今回の調査で、遺跡の中心は調査区中央南側部分から、さらに南側の現代住宅が広がる部分に展開すると考えられ、西渋田遺跡で生活していた古墳時代以降の人々の生活が少し垣間見れたのではないのでしょうか。

(津村 かおり)

金剛三昧院客殿及び台所の保存修理

早いもので、高野山で迎える厳しい冬も五度目となりました。当欄には一年振りの登場となりましたが、今回はその間の進捗状況をお伝えします。

松皮屋根の葺き替えは玄関と客殿部分を行い、既に終えていた台所部分と合わせ、葺き終えることが出来ました。ただ、現在は雪が積もっているため、その姿を現すのは、雪解けを待ち、仮屋根と足場の解体後となります。

左官工事は一昨年から始まりましたが、冬季の中断（土中の水分が凍るため作業不可）を挟み、春先から再開しました。漆喰には石灰や貝灰をはじめ、スサやノリなどに伝統的な材料を用いて、可能な限り古い漆喰層を下に残し、上塗り替えを行いました。

当建築は襖や貼付壁が多く、表具工事も広範囲に及びました。こちらも伝統的な工法に則って施工し、襖では都合八枚もの紙を重ねています。また美術工芸

品として重要文化財に指定されている障壁画も修理を終え、約三年半振りに帰ってききました。

畳はイ草の畳表を取り換える「表替え」（状態の良い畳表は裏返して使用する「裏返し」とした）を行うと共に、建物の建て起こしに伴って少し変動した部屋の形に合わせて敷き込むため、畳床を微調整しました。

その他にも設備関係の工事も行い、あと少して修理完了となりました。さて、工期は残り約一年。来年度は国宝・多宝塔の松皮屋根の葺き替えを行います。（結城 啓司）



①松皮：玄関の箕甲（みのこう）を葺いています。②左官：全ての壁面に漆喰の上塗りを行いました。③表具：本紙（完成時に見える紙）を貼っています。糊で和紙を一枚ずつ張り重ねます。右の建具は下張りの状況。④畳：表替えは現地で行い、一部の工程は手で縫いました。

和歌山文化財百景

登録有形文化財火伏医院とその保存修理

橋本の町は、高野山参詣の拠点として、応其上人によって紀の川北岸に開かれ、永代諸役免除、舟運の舟継権、塩市の独占権などを付与され、近隣屈指の都市として栄えてきました。

火伏医院は、橋本の町の中心部である橋本1丁目に、大和街道に面して家を構えています。もとは池田屋を名乗る塩問屋であった家です。

橋本町は塩市開催の独占権を持っていましたので、まさに橋本らしい商家の一軒といえるでしょう。主屋は享保6年(1721)年に建築された町家です。築300年近くにもなり、年代の明らかな町家建築としては、県内最古の類に属しています。当家は大正時代に病院を開業し、大正10年(1921)に主屋の西側に洋館の病院棟を建てました。現在残る主屋と病院棟は、国の登録有形文化財となっています。

主屋は桁行8間、梁間3間、ツシ二階建、切妻造^{さんがわら}棧瓦葺で、当初は桁行4間半の規模でした。江戸時代後期に東側の敷地を手に入れ、座敷部が増築され、現在の規模になりました。

病院棟は桁行3間半、梁間3間半、二階建、正面寄棟、背面切妻造棧瓦葺の建物で、主屋の西側に建っています。外観はペンキ塗りの南京下見板張で、縦長窓を開き、棟にはフィニアルを載せた洋館です。病院棟に入り口はなく、主屋から出入りし、主屋と一体に使うようになっています。また紀の川の洪水に備え、床を高床式に造っているのが特徴的です。

現在、橋本市により中心市街地の土地区画整理事業が施行されており、これにより火伏医院も移転し、主屋、病院棟は曳屋^{ひきや}することになりました。曳屋に併せ、今後の保存活用のため、根本的な修理を実施することになったもので、当センターは技術指導業務を受託しました。

1月上旬にまず病院棟が15m南側に曳屋されました。続いて主屋が2月に曳屋されます。移転先の地盤は地盤改良を施し、コンクリート基礎の上に据え付けます。曳屋に伴い、屋根の葺き替えや屋根野地の修理も行います。主屋には白蟻による被害が見られ、柱や^{どうさし}胴差は、根継ぎや取替修理をしています。病院棟は一階床板と土台の補強を行い、外壁のペンキを塗り直します。修理竣工後は引き続き病院として使われる予定です。(御船 達雄)



曳屋される病院棟、右はこれから曳屋する主屋。

建 築彫刻の話 ⑮

辰年^{たう}にちなんで、日高川町にある道成寺三重塔の彫刻を紹介します。各階の隅の尾垂木に「龍らしき」彫刻が見られます。同じように見えるかも知れませんが、はつきりと違いが表現されています。

一階と二階の龍らしき霊獣は口から何かを吐き出しています。一階は「波」、二階は「雲」です。水の上に雲がある、そんな発想もあるのでしょうか。水を吐く霊獣としては「摩伽羅」が候補に挙げられます。火伏せの意味を込めて、「鯨」へと姿を変えていった霊獣です。

「雲」を吐き出すのは「蜃」に違いありません。蜃は「氣」を吐くとされています。「氣」を雲で表現したのでしよう。蜃の吐いた気は、壮大な楼閣^{ろうかく}となって見えるので、それを「蜃気楼」と称したとされています。「辰」の本来の字は「蜃」だとの説もあるようです。

そして最上階にいるのが、天空に駆け昇る「龍」です。

この塔は宝暦十三年（一七六三）に再建されました。当時のお坊さんや大工さん達は、この彫刻にどんな思いを込めたのでしょうか。

（鳴海 祥博）



三階隅尾垂木「龍」



二階隅尾垂木「シン」



一階隅尾垂木「マカラ」

発 掘屋余話 ⑮ 古代の道

ながく発掘屋をやっています。未だに古代の道というのを掘り当てたことがありません。古代の道という曲がりくねった貧弱な道を想像しがちですが、そんなことはないですね。

奈良時代の初めには中央の命令を地方に伝えたり、逆に地方の変事をいち早く知らせるために三〇里（約16km）ごとに駅家を設けた総延長六五〇〇kmというりっぱな道を全国に整備します。いわゆる〈七道駅路〉と呼ばれるものですね。とくに当時もつとも重要視された大宰府に通じる山陽道や西海道の一部は幅12mという大路です。（ちなみに江戸時代の東海道でさえその幅は3.6mといわれています。）

古代の官道の研究は、当初文献や歴史地理学の独断場でしたが、80年代以降、考古学、発掘調査でも多く確認され、数々の成果を上げています。東山道^{とうざんどう}などがそのいい例ですね。

和歌山の場合、この官道は「南海道」と呼ばれ、奈良から橋本を経て紀の川北岸を西走していたことはたしかですが、未だにそのルートは解明されていません。不思議と発掘調査でも当たりませんね。唯一、和歌山市内の川辺遺跡の調査で両側に溝をもつ幅7mほどの道らしきものを検出していますが、それさえも確定したものではありません。何とか発掘で古代の官道、南海道を見つけたというのが筆者のひそかな願いです。

蛇足ながら江戸時代の官道とも言うべき五街道のひとつ中山道^{なかせんどう}で面白い話があります。木曾路を観光していた女子大生が「旧中山道」という案内板を見て、迷うことなく「いちにちじゅうやまみち」と読んでさうです。うーん、確かにあそこは山が多いしリアリティはありますが――。

（村田 弘）

催し物案内

和歌山県内の文化財関係イベント情報

(公財)和歌山県文化財センター <http://www.wabunse.or.jp/>

○調査報告会「近畿自動車道南仲に伴う発掘調査の成果」

日 時：平成24年2月25日(土)午後1時00分から午後4時30分

開催場所：田辺市民総合センター 2階交流ホール

内 容：当文化財センターでは、近畿自動車道南仲に伴い紀南地方で大規模な発掘調査を行っています。今回は、その成果について速報的に紹介するとともに、調査に関連して紀南の城についての紹介をおこないます。

県立紀伊風土記の丘 <http://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp/>

○冬期企画展「金属の考古学～金・銀・銅・鉄で作られたもの～」

期 間：平成24年1月17日(火)～3月11日(日)

内 容：弥生時代の銅鐸や古墳時代の鉄製品など、金・銀・銅・鉄で作られた金属資料を展示します。

和歌山県立博物館 <http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/>

○企画展「江戸時代・医者のからし」

期 間：平成24年1月28日(土)～3月4日(日)

内 容：麻酔薬を開発した華岡青洲関連資料と、藩の御殿医をつとめた広田家伝来資料を中心にして、医療技術が進歩した江戸時代の医者の実態に迫ります。

○企画展「たたかう村」

期 間：平成24年3月10日(土)～4月22日(日)

内 容：鎌倉時代～江戸時代におけるきのくにの村々は、隣村や領主、自然と闘っていました。実際に戦闘におよぶ場合もあれば、裁判などで争う場合もありました。この企画展では、古文書や絵図を中心にして、当時のたくましく自立したきのくにの村人の姿を紹介します。

8 催し物案内

「発掘屋余話」

「建築彫刻の話」

7 きのくに歴史小話

「和歌山文化財百景」

6 連載コラム 文化財の散歩道

5 文化財建造物課 短信

2 「かつらぎ町西洪田遺跡の発掘調査」

1 特集

西洪田遺跡

目次

和歌山市立博物館 <http://www.wakayama-city-museum.com/>

○冬季特別陳列「歴史を語る道具たち」

期 間：平成24年1月11日(水)～2月26日(日)

内 容：昔の道具にこめられた人々の生活の知恵や工夫の数々を、和歌山で実際に使われていた道具から探ります。

(公財)和歌山県文化財センター現場事務所等一覧

【埋蔵文化財課分室】

◎和歌山市新在家61番地-4

TEL 073-472-3710

◎和歌山市土佐町2丁目58-3

TEL 073-427-6174

【文化財建造物修理事務所】

◎金剛三昧院保存修理事務所

伊都郡高野町高野山425

TEL 0736-56-5578

◎長保寺保存修理事務所

海南市下津町上 685

TEL 073-492-3260

風車 57 (2012 冬号)

平成24年2月15日発行

(公財)和歌山県文化財センター

〒640-8404

和歌山市湊 571-1

TEL 073-433-3843

FAX 073-425-4595

Email maizou-1@wabunse.or.jp

URL <http://www.wabunse.or.jp>